

保育科学生の文章表現力低下の原因と対応

——日本語表現法の課題文と実習日誌を中心にして——

佐 藤 達 全¹⁾

Corresponding to the Cause of the Decline of the Writing and Expressing Abilities of the Students Majoring in Childcare

Tatsuzen Sato¹⁾

Abstract

In recent years, the decline of the writing and expressing abilities of college students is a problem. So I seek to discuss the problems and the causes I noticed through the students' writings in classes such as "Japanese Writing" offered at the Department of childcare and daily records of their practicum. On top of that, I intend to introduce the efforts and the results so far.

Key words: decreasing motivation for learning, education with latitude, lack of study habits, lack of awareness

キーワード: 学習意欲の低下, ゆとり教育, 学習習慣の欠如, 問題意識の欠如

1. はじめに

近年、実習を委託した幼稚園や保育園から、学生の日誌の書き方に問題があるとの指摘を受けることが多くなった。記述のしかたが適切でないというだけでなく、正しい日本語の文章が書けないという指摘が少なくないのである。文章を書くという作業は保育者にとって欠かせないものであるが、最近はそのことが認識できない学生も少なくない。

筆者の手元には20年ほど前のレポート(2年生:約150名分)が保管されているが、日本語としておかしい文章は全く見あたらない。高校卒業生の約半数が大学に進学するようになった現在、学生の基礎的な学力に何が起きているのだろうか。「ゆとり教育」「学習意欲の低下」等がとりざたされているが、そうした学生の実態を考察してみたい。

ところで、「国語はすべての基本」といわれる。特に、文章を読み取る能力や文章で表現する能力はすべての学習の基本となるものである。ところが、その能力はどんどん低下しているように

1) 育英短期大学保育学科

思えてならない。このことは筆者が感じているだけではない。平成24年2月に行われた国語に関する世論調査報告書『日本人の言語生活』（文化庁文化語部国語課：2012年9月 ぎょうせい発行）をみると、その中に「最近、日本人の日本語能力が低下しているという意見があるが、〈読む力〉〈書く力〉〈話す力〉〈聞く力〉の四つの分野の日本語能力についてどう思うか」という質問がある。その結果は【表1】のとおりであるが、報告書では、その結果を平成13年度の調査と比べながら次のようにコメントしている。

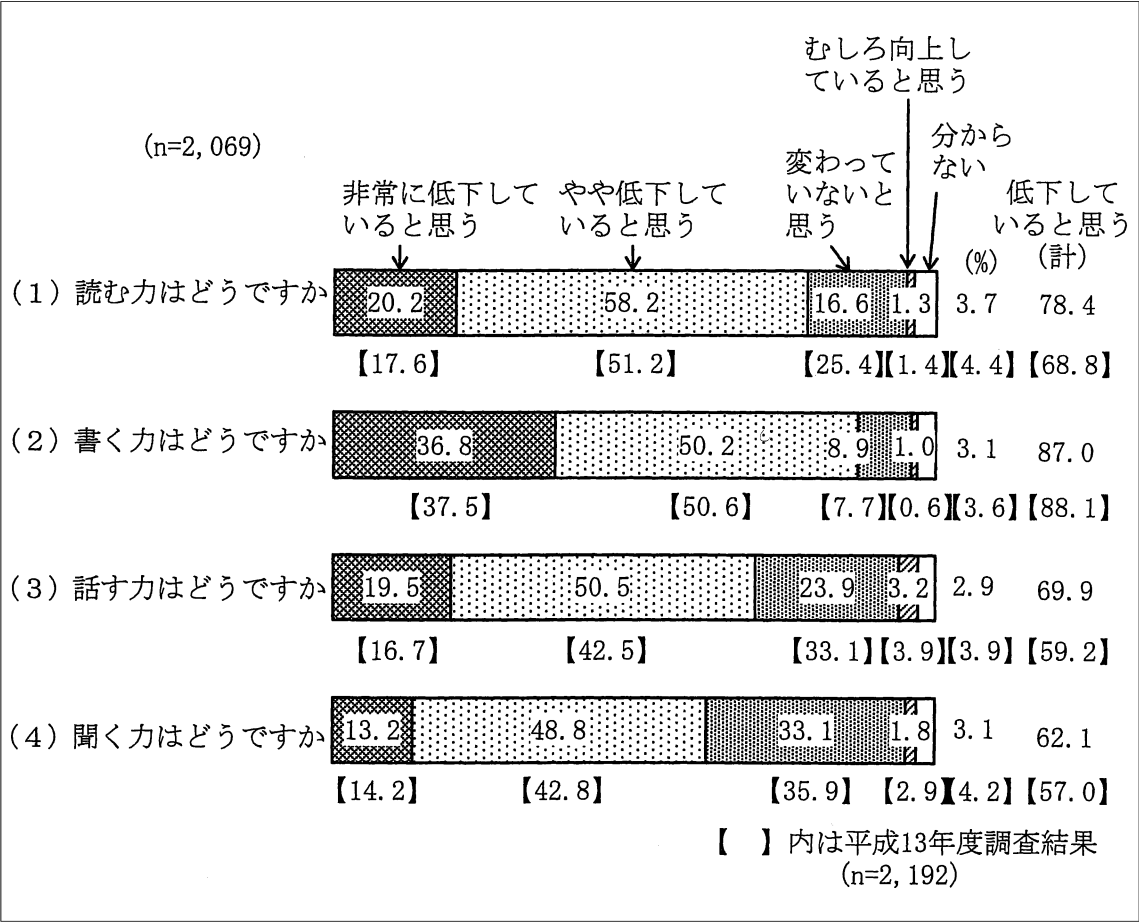


表1 日本人の日本語能力

「非常に低下していると思う」の割合は、「書く力」が36.8%で最も高く、次いで「読む力」(20.2%)、話す力(19.5%)が約2割、「聞く力」が13.2%となっている。これに「やや低下していると思う」を合わせた「低下していると思う(計)」の割合は4分野とも6割を超えており、「書く力」が87.0%、「読む力」が78.4%、「話す力」が69.9%、「聞く力」が62.1%となっている。一方、「むしろ向上していると思う」の割合は最も高い「話す力」でも、3.2%である。また、「変わっていないと思う」の割合は「聞く力」が33.1%、「話す力」が23.9%、「読む力」が16.6%、「書く力」が8.9%である。

平成13年度調査結果と比較すると、「低下していると思う(計)」の割合は、「書く力」では余り

変化が見られないが、「読む力」は10ポイント、「話す力」は11ポイント、「聞く力」は5ポイント増加している。(同上書 10ページ)

この調査は、全国の16歳以上の男女3,000人を「層化2段無作為抽出法」で選んで実施したもので、有効回収率は59.6%、2,069人であったが、「書く力」が相当に低下していると感じている人が多いことがわかる。

2. 保育科学生の文章

この結果と符合するように、本学学生の文章を書く力も一段と低下してきたように感じられてならない。筆者が担当している科目（日本語の表現法）の性格上、課題文を提出してもらうことが少なくないが、近年、表現能力に問題のある学生が非常に多くなった。学生が書いた文章の一例を示すと次のようである。

〈例文1〉子どもに何を聞かれてもしっかりと答えられるようにしたいです。

〈例文2〉たくさんのことを身につけて自信につなげたいです。

〈例文3〉先生方の言葉がけは、ひとり一人をよく見て、それぞれにあった言葉がけをしています。

〈例文4〉私が実習で身につけたいことは、保育のプロとしての行動・言葉遣いなどすべてを吸収したいと思っています。

〈例文5〉私が教育実習で身につけたいと思うことは、周りをしっかりと見て、子どもたちの安全を第一に考えられる保育者になることです。

〈例文6〉私が気をつけていることは、恥ずかしがらずに自分の意見を他の人にわかるように心がけています。

〈例文7〉なぜなら、保育者が子どもに話しかける言葉は子どもにとって初めての言葉が多いです。

〈例文8〉けんかやお弁当を食べているときにどのような言葉がけをしたらよいか観察したいです。

〈例文9〉今回の教育実習で、子どものしかり方や泣いている子がいたらどう対処すればいいのかをしっかりと身につけたいと思います。

〈例文10〉マナーの面での言葉遣いでもあるが、子どもにとってよりわかりやすい言葉。

〈例文11〉二週間の教育実習で身に付けたいことは、先生同士のコミュニケーションや子どもに対する対応など、現場でしか学ぶことのできないもの。

〈例文12〉絵本の読み聞かせや紙芝居のしかたをこの実習で自分のものにできたらいいと思います。

急激に増えてきたのは、〈例文1〉〈例文2〉のような、いわゆる「タラちゃん言葉」である。「タラちゃん言葉」は漫画のサザエさんに登場する幼児（タラちゃん）が使っている言葉で、話し言葉では大人も使用するが、文章に書くことはない。それは、「です」という述語には「たい」

のような「活用語は接続しない」という決まり（文法）があるためである。この表現が容認されるのは、小学生までである。実際、全国の小学生の作文コンクール等の入賞作には「タラちゃん言葉」で書かれた文章が少なくない。

3. 小学生の作文との対比

学生の文章と対比するために、小学生の書いた作文を紹介しておこう^(注1)。

【おもしろかったたいいく（りかこ）】

たいいくかんで たいいくをしました。ふたいの上にへいきんだいをのせて、上からすべったり、下からのぼったりするのが、とってもおもしろかったです。どうしておもしろいかというと、りかは、へいきんだいやとびばこが、大すきだからです。

ならぶじゅんが、まえから二ばんめだったので、はやくすべれるぞと、うきうきしました。はじめは、すべったりのぼったりするのがこわいかとおもったけど、やってみると、ぜんぜんこわくありませんでした。

ならんでつぎのばんをまっているとき、足がかってにうごいて、とてもたのしいきぶんでした。つぎのたいいくも、きょうとおなじだといいなあと、おもいました。

この文章は1年生の〈りかこ〉さんが書いたもので、「おもしろかったです」という〈タラちゃん言葉〉が使われているが、並列の「たり」や「どうしておもしろいかというと」という理由を述べる言葉に対応する「大すきだからです」という表現がきちんと書かれていて、保育科の学生の文章よりもしっかりと書かれていることがわかる。もう一人、2年生の〈あさみ〉さんの文章を紹介しておこう。

【わたしのたからもの（あさみ）】

わたしのたからものは、こんのヘヤーバンドです。かぞくで大きかに行ったとき、おばあちゃんがかけてくれたものです。

そのとき、くろとこんとみどりがありました。こんをえらんだのは、青っぽい色がすきだからです。

わたしは、ヘヤーバンドをすると前がよく見えるから、毎日しています。

それに、ヘヤーバンドをしていると、おとなっぽく見えるのも、気にいっています。

わたしは、もっとかわいく見えるように、ヘヤーバンドに花のゴムをつけます。

つけるところを上にしたたり、いちばん下にしたたりしてくふうします。

そうすると、かわいいヘヤーバンドになってうれしいです。

いつまでもつけていきたいです。

この文章は2年生の〈あさみ〉さんが書いたもので、「うれしいです」「つけていきたいです」というタラちゃん言葉が使われているが、「こんをえらんだのは」に対して「すきだからです」がき

ちんに対応している。また、「上にしたり、いちばん下にしたり」と並列の「たり」の使い方も適切である。むしろ、最近は大人が書く文章の中に「タラちゃん言葉」が増えてきたように感じられる。

4. 正しい文章が書けない実態

さらに、〈例文3〉〈例文4〉のように、主語と述語がきちんとつながっていない文章も非常に多い。これに関連して、〈例文5〉〈例文6〉のように、いわゆる「説明文」が正しく書けない学生も多くなった^(注2)。同じような事例として、〈例文7〉のように、「なぜなら」と理由を述べるはずなのに、述語につながらない文章も少なくない。

もう一つ急激に増えているのは、適切でない並列表現である。並列表現でこれまで多かったのは「たり」を一つしか書かない文章であったが、それに加えて〈例文8〉〈例文9〉のような事例も増えてきた。「や」の前後に二つの事柄を並べるときには同種類の表現にしなくてはならないのに、この例文のように、初めが「名詞節」であるにもかかわらず後半が「文節」になっている文章が増えてきた。新顔として、目につくようになったのは〈例文10〉〈例文11〉のように「述語」がなく、文章になっていないものである。

さらに最近の文章で気になることは〈例文12〉のように、自分の意志を表現する文章であるにもかかわらず、「……したらいい」「……になったらいい」と他人ごとのような表現が増えていることである。これは学生の自信のなさが表れているのかもしれない。

このほかにも適切でない表現が非常に多く、訂正する必要のない文章（400字の原稿用紙1枚）を書いている学生はクラス（約50名）で数名しかいない。「タラちゃん言葉」はどのクラスでも10人以上で、多いクラスでは4割近くに上る。主語と述語がつかない文章も10人近くになる。こうした状況では、実習指導をしていただく幼稚園や保育園から「実習日誌が書けない」と指摘されるのも当然であるが、実習はなんとかお茶を濁したとしても、保育者として就職した後に日々の保育としっかり取り組んでいけるのだろうかと不安が大きくなる。

現に、昨年度は筆者の研究室にも数人の卒業生が深刻な顔で訪問してきたことがある。数人というのは少ないと思われるかもしれないが、この事例は「なんとか仕事としての文章が書けるようになりたい」という切実な思いを持っている卒業生であり、「そんな面倒なことをするくらいなら、退職して別な仕事を見つけた方がいい」と考える卒業生の方が多いようである。もちろん、退職の理由は「文章が書けない」ことだけではないであろうが、1年以内の「早期退職者」も以前に比べて増えている^(注3)。

5. 保育現場にも広がっているおかしい文章

学生の文章力が低下しているのであるから、保育現場にも文章力の高くない保育者が勤務していることは想像に難くない。以前からそのことは感じていたのであるが、本年度の実習では、危惧していたことが現実のものとなってしまった。それは、実習指導を担当した中堅の保育者が実習生の書いた日誌の「正しい文章」を添削してしまった次のような事例である。

〈事例1〉実習生の文章「先生からご指摘をいただいた点に留意して明日の実習で絵本の読み聞かせをしたいと思います」という日誌の文章を、実習生のクラス担任の保育者が「読み聞かせをしたいです」と赤字で修正した。

〈事例2〉「年長児の遊びを観察していて感じたことは、年少クラスの子どもとは遊び方が大きく変わっていることです」という実習生の文章を、指導するクラス担任が「大きく変わっていると感じました」と修正した。

〈事例1〉はいわゆる「タラちゃん言葉」であり、〈事例2〉のように修正したのでは「感じたことは」という主語に対応する述語としては不適切な表現になってしまう。そこで、学生の実習日誌を確認したところ、本年度はこうした主語と述語の関係がおかしい数例の事例が見られた。さらに、複数の園で保育者が書いたコメントの中に正しくない表現が何件も見つかった。このことから、保育現場でも正しい文章表現のできない保育者が少なくないであろうことが確認できた。次の事例は実習した学生が、指導を受けた担任の保育者から実習日誌に書いてもらったコメントである。

- ①今後の実習でも、そのことを忘れずに実習に望んでください。
- ②言葉かけはもちろんですが、ときには補助したり難しい部分だけやってあげることもあります。
- ③食べれないから残こしてもよいとすると、周りの子どもに影響が出ます。
- ④子どもに一生懸命語りかけているようすが見れてよかったです。
- ⑤最初は戸惑っていた子どもたちも徐々に打ち解けて楽しく過ごせました。
- ⑥挨拶は簡単なことですが、以外といい加減になってしまいがちです。
- ⑦混合クラスの初日とゆうことで、戸惑ってしまったようですが、子どもたちの遊びや会話にも入れてよかったです。
- ⑧子どもの名前を覚え、接極的に話かけていたので、よかったです。

6. 授業での取り組み

本学保育科の学生にかぎらず、現在は大学生（短大生）の学力低下が全国的に問題になっていると、大学の授業を理解できるようにするために高等学校の「補習」を実施している大学も多くなっているが、文章力についても同様に、レポートの書き方や文章の書き方に関する授業を行っている大学は相当な数に上っている。その一方で、書店には文章の書き方についての書籍が多数並んでいることから、社会人の需要も多いことが想像できる。

筆者もこうした事態に対し、十年ほど前から対策を実行しているが、数年前から実施している方法を紹介すると次のようなものである。

- ①毎週の授業終了時に宿題として400字の課題文を課す。
- ②15回の課題文の内容は大きく二種類に分けられる。一つは自分と向きあうための課題で「希

- 望を実現するために努力していること」「自分の弱点とその克服法」「私の長所」「実習で感動したこと」等である。もう一つは保育者として必要な社会の問題に目を向けるための課題で「少子化のマイナス面とプラス面」「男女平等」「夫婦共働き」「高齢化社会の問題」等である。
- ③学生は次の週の授業で課題を提出する。それを授業担当者である筆者が読んで、訂正すべき部分があれば赤ペンでチェックして次の週に返却する。学生はチェックされた部分を自宅で訂正して指示された日に再提出する。
- ④訂正する必要のない課題文には赤ペンで○をつけて返却する。
- ⑤15回の課題がすべて提出されないと単位の認定は行わない。

学生にとって「逃げ場のない」課題であるが、提出された課題文にはすべて目を通して次の週の授業で返却している。大事な点は「必ず目を通すこと」と「遅れないで次の週に返却すること」で、こうすることによって授業担当者の「本気度」を示すのである。すると、最初は安易に考えていた学生も真剣になってくる。

また、一人一人の課題文をチェックする理由は、講義形式で文章の書き方を説明しても、「気づいてほしい学生が気づかない」ことがわかったからである。これは学生に勉強させるための授業担当者の実力行使であるが、担当者の本気度が伝わると、渋々ながら学生はついてくる。もちろん、「(遊ぶ) 時間がなくなる」と恨まれることは間違いない。しかし、2年生の夏期休業中に実施されている就職のための「適性検査」(群馬県私立幼稚園協会と群馬県保育協議会で実施)の小論文や卒業後の仕事で「作文を書いて良かった」と感じているとの情報が伝わってくることから、マイナスからプラスへと評価を変える学生や卒業生が少なくないようである。

学生の文章力の実態やこうした取り組みについては、これまでに何回かの発表を行っているので、詳細はそれらを参照してほしい^(注4)。

7. 正しい文章が書けない原因

そうした研究を通して、保育科学生が書く文章の問題点を見つけ出して整理し、正しい文章が書けるようにするための取り組みを行うと同時にその原因を考えてきた。その結果、学生の多くが短大に入学するまでに、必ずしも十分な文章指導を受けてこなかったことが浮き彫りになってきた。

その理由として、いわゆる「ゆとり教育」を指摘する声が少なくない。確かに学校5日制の導入や教授内容の削減が大きな影響を及ぼしていることは否定できない^(注5)。

しかし、本当にそれだけが原因なのだろうか。学生の書く文章があまりにもひどく、最近では、先に紹介した小学1年生と2年生と同レベルかそれよりも「お粗末」な文章が多く見られる原因をあえて言うなら、短大の保育科に入学してくる学生の多くが、小中学校時代に作文だけでなく、他の教科においてもその内容を十分に理解しないまま通過してきたからではないだろうか。近年、学力の格差が拡大してきたと言われるが、私たちの心に「格差が生じるのは仕方のないこと」という思いが生まれていることは否定できない。けれども、こうした状況は、ちょっとした指導を継続的に実施することによってかなり改善されると考えられる。それは、課題文を赤ペンでチェッ

クされた学生が最終回の課題文に書いていた次のような感想がヒントになっている。

【学生の感想1】

先生から添削していただいた作文を直してみると、少しの言葉の使い方や余分なところをなくすだけで、今までより文章の流れがスムーズになり、内容もわかりやすくなって、自分の文章のどこが悪かったのか、間違っていたのかがわかりました。

【学生の感想2】

課題文を書き始めた頃は、1枚の原稿用紙を書き終わるまでに3時間以上もかかりました。原稿用紙の終わりの4～5行に何を書いたらよいのか言葉が浮かんでこないこともありました。けれども、5回目頃からは、すらすらと書きたいことが浮かぶようになりました。そして、1枚の原稿用紙を書き終える時間も確実に短くなっていきました。

学生が書く文章はますますひどくなっているが、その原因は小学生の頃の文章の書き方に根があるように思われる。それは、文章表現がますます「小学生の文章」に近づいているからである。というよりも、次の例文からも明らかなように、短大生の文章表現力は小学生の段階から成長していないのかもしれない。

【あまりにも幼い表現】

〈例文1〉保育に関わる職業に就職することができればいいなと思っています。

〈例文2〉私の卒業後の就職希望として今、考えているのは保育園か施設で就職できればいいなと思っています。

〈例文3〉生活の環境が違く、精神的に悩みも持っていたと思うけど、元気に学校へ行ってました。

〈例文4〉私もこのような先生になれたらいいなと思いました。

〈例文5〉大きい組の子もそうゆう風に教わってきたんだろうなと思いました。

〈例文6〉先生のよい所を盗んで自分の物にしたいです。

【「てにをは」がでたらめな表現】

〈例文1〉幼稚園へ就職して、小学校へはいる前の保育をしっかりとします。

〈例文2〉反省会の時、先生は「この時期はとても大事なんだよ」と言ってた言葉が私の心にとっても響きました。

【支離滅裂な文章の組み立て】

〈例文1〉未満児は自分でできることが少なく、成長を支えていける存在になりたいです。

〈例文2〉私は入学当初は幼稚園教諭になりたいと思い育英短大に入学しました。

〈例文3〉ゲームなどの室内遊び多い今の子どもたちにとって、外に出て多くの自然の中でさまざまな発見、驚きを身体で感じることは、とてもよい刺激になると思います。

〈例文 4〉私の卒業後の希望は、入学したときの希望と今現在の希望は大きく変わりました。

〈例文 5〉また、現在保育園に乳児の頃から通う子が増加の現象です。

〈例文 6〉先生方にもご迷惑をかけてしまい、大変お世話になりました。

【主語と述語がつながっていない】

〈例文 1〉私の卒業後の希望は保育園に就職し、毎日充実した生活を送りたいです。

〈例文 2〉私が実習で気づいたことは、学校の勉強だけでは学べないことを保育園で教えていただき、すごく良い体験をさせていただきました。

〈例文 3〉保育士という資格は、保育所・幼稚園以外にも、施設などで活躍している人もいと知りました。

〈例文 4〉私が幼稚園実習で身につけたいことは、実習する幼稚園の特色・特徴です。

〈例文 5〉そこで身につけたいことは、制作の指導や環境構成のしかたなどたくさん身につけたいです。

〈例文 6〉もう一つの弱点は、あの人は私をどのように見ているのだろうか、自分への評価などを気にしてしまいます。

【話し言葉と書きことばの区別がつかない】

〈例文 1〉子どもたちにちゃんと伝わるように話したいです。

〈例文 2〉どうしても必要なときは援助するけど、それ以外の時は見守ることが大切だと教えてもらいました。

〈例文 3〉何にしても保育活動に導入の部分は必要だし、大切だと思います。

〈例文 4〉ケンカの仲裁も、すべてではないけど、解決できることも増えてきました。

【助詞の使い方が適切でない】

〈例文 1〉今回の実習を通して自分の課題がたくさん見つけることができました。

〈例文 2〉先生方は子どもにわかってくれるようないろんな表現をしていてすごいなと思いました。

〈例文 3〉私に不足している点は、積極的に行動することです。現場の先生も「もう少し積極的に学ばないと」と言われてしまったので、やっぱり不足していると思いました。

〈例文 4〉私はこの実習で身につけたいことは二つあります。

〈例文 5〉私は実習中、一人の子が「この花きれいだよ」と言いました。

8. 文章力を改善するポイント

いずれにしても、小中学校時代に身につけているはずの基本的な書き方が身につけていない学生の問題点を改善するには、社会に出たときに最低限の文章力が求められることを認識させた上で、次のようなことに根気よく取り組む必要がある。仕事を間違いなく処理するためには文章力が必要なことに気がつけば学習しようという意欲は高くなるのではないだろうか。

①正しい助詞の使い方（「てにをは」）をしっかりと覚えさせる。

②接続詞を正しく使えるようにする。

③句読点を正しく打てるようにする。

④送りがなを正しく書けるようにする（原則として送り仮名は活用語尾ということ覚えさせる）。

文章構成力が低い学生に必要なことは、大切なことをしっかりと聞く習慣をつけさせることと簡単なことを繰り返す根気強さを身につけさせることである。また、適切な文章表現のできない学生によく見られる傾向は、文章が長いことである。課題文で長いものは原稿用紙で7～8行も句点がなく、「ので」や「が」でつなげている。当然のことながら主語と述語の関連が明確でない。おそらく、書いている本人に聞いても何が言いたいのか答えられないのではないだろうか。参考までに、学生が書いた長文を紹介しておこう。

〈例文1〉園の先生方は季節や行事にあった曲を選曲し、アレンジを加えた曲を子どもたちと一緒に楽しんでいる姿を観察させていただき、少しアレンジを加えたり音の強弱をつけることで子どもの歌いたいという気持ちが高まることを知ることができたので私も自分なりに考えて努力したいと思います。

〈例文2〉保育者になるということは、子どもを保護すること、そして自分で生きていく力、自立へ向けての教育をすることを目的として子どもに働きかける人のことです。

よく言われることだが、わかりやすい文章というのは、「一回読んだだけで内容がしっかりと頭に入る文章」である。そのような文章を書くポイントの一つは「主語」と「述語」をきちんと対応させることである。さらに①一文を短く書くようにする ②必要な接続詞をきちんと使う ③長すぎる主語は使わない ④主語と述語を近づける 等を心がけることで、わかりやすい文章が自然に書けるようになる。

次に「接続詞」を例に挙げてみよう。たとえば、「国語の試験が0点だった。」という文に続けて接続詞〈だから〉〈しかし〉〈なぜなら〉〈つまり〉〈さらに〉を使って文を書いてみる。

国語の試験が0点だった。だから、お父さんにしかられた。

国語の試験が0点だった。しかし、お父さんは怒らなかった。

国語の試験が0点だった。なぜなら、勉強をしなかったからだ。

国語の試験が0点だった。つまり、僕は国語の勉強が苦手なのだ。

国語の試験が0点だった。さらに、数学の試験も0点だった。

次に、「今日は風が強かった。」に続けて上の接続詞を使って文を書いてみる。このように繰り返していくことで、文を書くポイントが身についてくるのである。

ところが、学生の文章には、上に紹介した問題点のほかにも、次のような「気になる表現」が数多く見られる。

①誤字や当て字が多い。

②助詞の使い方がおかしく、正しい日本語の文章が書けていない。

- ③話し言葉のままで文章を書いている。
- ④「見える」「食べれる」などのいわゆる「らぬき言葉」で書くことが多い。
- ⑤「違く」「やっぱし」「なにげに」など、最新の「はやり言葉」が多く書かれている。
- ⑥語彙が乏しいためなのか、同じ形容詞や副詞を何度も繰り返し使っている。
- ⑦文末に「思います」や「です」といった同じ表現がくり返されている。
- ⑧代名詞を用いた表現がほとんど見られない。
- ⑨推量表現「～ではないでしょうか」がほとんど見られない（これは、与えられることに慣れすぎて想像力が乏しくなったからではないだろうか）。
- ⑩文章の書き方ではないが、原稿用紙を使った正しい書き方を身につけていない学生が少なくない。

9. 指導する側の問題

ところで、このような問題点が多くなる原因は、必ずしも学生の側にだけあるだけでないような気がする。それは、レポートに学生が次のように書いていたからである。

【学生が指摘したこと】

今まで作文を書いて先生に提出しても、丸がついているだけだったりハンコが押してあるだけだったり、添削していただいたことはありません。そのため、間違いを正しいと思いこみ、そのままにしていました。でも、この授業で直すことができ、本当に良かったと思います。

また、「発達」の「達」を「幸」に書いていた学生が多いため、授業の中で間違いを指摘し、正しくは「土」に「羊」だと説明したところ、何人もの学生が「今までの作文やレポートにもずっと〈幸〉と書いてきたけれど、一度も先生から間違っているという指摘を受けたことがなかったので、正しいと思っていた」と報告してきた。学生が卒業した小学校や中学校県内全域や近県に及んでいるが、このようなことから、多くの学生が十分な指導を受けてこなかったことが想像できる。

学校が五日制になり、授業時間も少なくなった現在の小中学校では、十分な理解力がある児童・生徒なら教科書を読むだけで正しい知識を身につけることはできるだろうが、平均的な児童・生徒には丁寧な指導が必要なのではないだろうか。学生のレポートには次のようにも書かれていた。

【学生の作文に見られる重要な感想】

〈感想1〉文章を書いているときは自分の間違いにまったく気づかず、指摘されて、はっとすることが何度もありました。

〈感想2〉自分が書いていた文章が、これほど間違っていたとは思いませんでした。

〈感想3〉添削を受けてからは、直されたことを注意して書くようになり、意識が変わったような気がします。

10. 置き去りにされた根っこの教育

このような取り組みを続けた結果、これまではそれなりの成果が得られたと感じているが、最近の学生の文章力はさらに低下して、提出された課題文を赤でチェックして返却しても訂正のしかたがわからない学生が多くなってきたようである。その理由は、「2 保育科学生の文章」中の〈例文1〉〈例文2〉で紹介したような「タラちゃん言葉」が急激に増えていること、〈例文5〉〈例文6〉のように文の前半と後半がつながっていないこと、〈例文10〉〈例文11〉のように文章になっていないことなどが非常に目立ってきたからである。小学生並みの精神年齢と思わざるを得ない学生の割合が増えてきたようである。さらに、話し言葉をそのまま文章に書いている学生や漢字で書くのが当然の言葉を仮名で書いている学生も多くなった。

こうした「つまずき」の原因を探るために、小学校で学習する漢字（1006字）をどれくらい覚えているかテストしたことがある。漢字の読み仮名と書き取り・熟語の意味を問うもの等で50問を二年生（220名）を対象に行った結果、80点以上の学生は43名しか居なかった。平均点は60点台で、約10パーセントが50点以下であった。

点数の低い学生を見ていて感じるのは、一つ一つの取り組みがきちんとできていないことである。学生の集中力を確かめるために授業中いろいろな「実験」を行っているが、その一つは課題文の提出方法である。原稿用紙の「左上の角」に提出回数を直径が約1センチの○の中に書くように指示しているのであるが、○の大きさが指示されたとおりでない学生が多い。また、原稿用紙2枚（800字）の課題を出した時には、原稿用紙を2枚重ねてホチキスで右上の一カ所を留めるように指示するが、左上を止めたり重ねただけだったりする学生も少なくない。これらは、いずれも指示をしっかりと聞いていないことが原因と思われる。

現在の豊かすぎる社会では、ほしいものは望めば何でも与えられ、自分で努力する必要性は薄い。「気になる表現」で指摘したように「推量表現がほとんど見られない」ことも、あれこれと自分で考えなくても困ることがない現実を反映していると言えるのではないだろうか。

さらに、基礎的な学習は積み重ねが鍵をにぎっていると考えられる。また、繰り返して学習するためには根気よさが必要で、そのためには基礎的な生活習慣を身につけることも影響してくるであろう。ところが、これまで調査したところによると、毎日の生活のリズムが確立されておらず、一定の学習時間を確保していない学生が少なくない。しかも、自分から課題に取り組もうともしていないのである。

そして、多くの学生の口から出てくる言葉は「わからない」「できない」である。ところが、実態は「わかろうとしていない」のであり、「しようとしていない」のである。保育は子どもの「いのち」を預かる仕事である。今、何をしなければならぬかを判断し、それを瞬時に行動につなげる力（考動力）が求められている。もはや小手先の「入学前教育」では、大学や短期大学が求めている学習に取り組むことは難しくなっているのではないか。初等教育から根本的に学び方を考えていかなければならない段階に来ているように思われる。

11. 問題の原因と今後に向けての対応

これまでに提出してもらった課題文を詳細に検討してみると、文章表現力を身につけていない学生にはある共通点が潜んでいるように感じられる。それを示しているのが次の文章である。

〈例文1〉私は、ピアノも運動も勉強もいつも中途半端でした。

〈例文2〉前回の実習では、準備不足のためにできないことがたくさんありました。

〈例文3〉早くやらなければと頭ではわかっているが、なかなか行動に移せませんでした。

〈例文4〉私が改善しなければならないことは意志の弱さです。

〈例文5〉私に必要なことは、だらけずに最後までしっかりと取り組むことです。

〈例文6〉私は苦手なことはすぐにあきらめてしまいます。

〈例文7〉私の悪いところは、いつも提出の直前になって慌ててすることです。

実習や授業に取り組む姿勢について振り返る文章には、こうした表現が非常に多く見られる。このことから、多くの学生が学ぶべきことを「確実に」「注意して」学んでいない、つまり学習に対する意識が「アバウト」であることが想像できる。事実、学生が書いた文章にはそれを裏付けるような事例も少なくない。

〈事例1〉「見る」(小学1年生で学習)「貝」と書いている学生が少なくない。

〈事例2〉「話」(小学2年生で学習)名詞の場合は「話」で、動詞の場合は「話す」と送り仮名をつけるが、「話し」と名詞でも「し」をつけるが学生が多い。

〈事例3〉「拾」(小学3年生で学習)と「捨」(小学6年生で学習)の区別がつかない。

〈事例4〉「成績」の「績」を「面積」の「積」と書く学生が多い。

〈事例5〉「接」(小学5年生で学習)の送り仮名を「っして」と書く学生がいる。

「貸す」と「借りる」(小学5年生で学習)の区別がつかない学生がいる。

上に上げた事例はクラス(50人)に何人も見られる。このほかにも、「任かせる」「精心力」「向かえる」「かた向ける」「講議」「急がしい」「完璧」等の間違いが相当数の学生に見られる。いずれの事例も、最初に学習するときにしっかりと覚えておけば間違えることはないはずである。筆者は授業中に「きちんと」をキーワードとして提示しているが、多くの学生に共通しているのは、「肝心な部分をきちんと学習する」ことではないだろうか。

このほかにも、「備える」の「つくり」の部分の「縦線」を2本書いている学生や「発達」の「達」の「つくり」を「幸」のように2本にしている学生も少なくない。「初心」の編を「ネ」と書いて「、」をつけない学生もいる。いずれの事例も学習するときに「注意が不足している」からであろう。もちろん、学生だけを責めるつもりはない。それは、小中学校で必ずしも十分な指導を受けてこない学生が少なくないであろうと想像できるからである。その一例として既に述べたように、「発達」の「達」のつくりを「幸」と書いていた学生に対して「土」に「羊」だと説明したところ、その学生が「私はこれまでずっとレポートにも〈幸〉と書いていましたが、一度も先生に指摘されたことがなかったので、正しいと思っていました」と話してくれたからである。もちろん、こうした事例は一人だけではない。

教育現場で先生方の「多忙さ」が指摘されているが、そのことに触れるつもりはない。しかし、高等教育の大衆化の中で、基礎的な学習が必ずしも十分でない学生が大量に大学や短大に入学していることは否定できない^(注6)。入学前の学習状況はともかくとして、卒業後に専門職に就く場合には最低限の能力を身につけておかなければならないであろう。

多くの保育学科の学生に共通しているのは、最終回の課題文にかなりの学生が書いていた「自分に甘えていたところがたくさんあった」「できないとすぐにいやになって投げ出していました」ということである。幼稚園や保育園への就職率が高いことを評価して入学してくる学生が大半であるため、ほとんどの学生は「保育者」になりたいと考えている。しかし、保育者に求められることがどのようなことなのかを真剣に考える学生は多くない。さらに、短大に入学するまでの学習も十分ではない。「わからなければ誰かが教えてくれるだろう」「就職率が高いのだから大学が就職させてくれるだろう」といった他力本願の学生が少なくないのである。

ところが、保育者になってから「手取り足取り」して「親切に」教えてくれる人はいないであろう。頼りになるのは自分が身につけた知識と保育技能である。文章力もそのひとつである。卒業までにはなんとか仕事を進める上で求められる力をつけなくてはならない。そのためには、小手先の「入学前教育」ではなく、小学校や中学校で学習した内容にまで遡っての教育を行わなければならない時代になったと考えている。また、保育科に入学してくる学生の格差も拡大しているため、一人一人の能力に応じた取り組みも重要である。その観点から、作文の添削指導には大きな意味があるのではないだろうか^(注7)。

(注1) 小学生の作文には、いわゆる「タラちゃんことば」がしばしば登場する。筆者の手元には『第56回全国小・中学校作文コンクール 作文優秀作品集』(2007年4月1日 オーク発行)があるが、文部科学大臣賞の受賞作品にもタラちゃん言葉は見られる。

(注2) 最近では学生だけでなく、NHKのような公共放送のニュース原稿にも「説明文」のおかしな表現が目立つようになった。〈ニュースの例文〉「昨日、〇〇市で××の会が開かれました。この会は〇〇市が主催しました」のような表現で、本来は「この会は〇〇市が主催したものです」と表現しなければ主語と述語の関係がつかないはずである。

(注3) 卒業生の正確な動向はなかなかわからないが、間接的な情報も含めると、平成25年3月の卒業生の中で平成26年3月までに退職したり退職を決めたりした人数は30名近くになるようである(幼稚園と保育園と施設への就職者は約210名である)。

(注4) これまでの発表を次に紹介しておくので、詳細は発表論文集等を参照してほしい。

【口頭での発表】

* 「保育者をめざす学生の基礎学力について……文章表現に見える問題点とその対応……」

(全国保育士養成協議会第45回研究大会 2006年9月 広島市・安田女子大)

* 「保育科学生の文章表現に見える問題点……学習習慣と基本的生活習慣について……」

(全国保育士養成協議会第46回研究大会 2007年9月 鹿児島市・城山観光ホテル)

* 「保育者を」めざす学生の想像力を高めるためのこころみ……文章表現に見える問題点を出発点にして……」

(全国保育士養成協議会第47回研究大会 2008年9月 函館市・函館観光ホテル)

* 「文章表現からみた保育士養成の問題点……短大生の学習意欲と基礎学力を中心に……」

(全国保育士養成協議会第48回研究大会 2009年9月 仙台市・東北福祉大学)

* 「保育者をめざす学生の生活と学習について……大学全入時代の問題と保育者の気質……」

(全国保育士養成協議会第49回研究大会 2010年9月 甲府市・山梨学院大学)

* 「短期大学における保育士養成と保育者論」

(全国保育士養成協議会第50回研究大会 2011年9月 富山市・富山県民会館)

* 「書くことと話すことからみた保育科学生の問題と対応について」

(全国保育士養成協議会第51回研究大会 2012年9月 京都市・京都文教短大)

いずれも、学生が書く文章の問題点を紹介しながら、正しい文章が書けない理由や学習意欲、基礎的な学力等について考察し、授業での取り組みによる学生の意識変化や文章を書く力がどのように変わったかを報告した。

【研究紀要に掲載された論文】

* 「保育科学生の文章表現力について」 (『育英短期大学研究紀要』19 2002年2月)

学生が書く文章にどのような問題があるかを指摘して間違いを分類した。

* 「文章表現力から見た保育科学生の問題点」 (『育英短期大学研究紀要』23 2006年2月)

間違った文章の背後に存在する問題を考察した。

* 「保育者をめざす学生の基礎学力と生活習慣……文章表現にみえる問題点を中心に……」

(『育英短期大学研究紀要』25 2008年2月)

正しい文章が書けない背景について生活習慣との関連で考察した。

* 「短期大学における保育士養成について……基礎学力と学習意欲を中心に……」

(『育英短期大学研究紀要』27 2010年2月)

間違った文章を頻繁に書いている学生によく見られる学習意欲の欠如について考察した。

* 「短期大学における保育士養成について……基礎学力や学習意欲以前の問題を中心に……」

(『育英短期大学研究紀要』28 2011年2月)

基礎学力や学習意欲低下の背後にある問題点について考察した。

* 「短期大学における保育者養成と保育者論について」 (『育英短期大学研究紀要』29 2012年3月)

短期大学で保育者を養成する際の問題点を考察した。

* 「保育科学生に対する作文指導の目的とその結果について……日本語の表現法と保育者論の授業を通して」 (『育英短期大学研究紀要』30 2013年3月)

作文指導をすることで学生の学習意欲がどのように変化したかを考察した。

(注5) このことに関して読売新聞に連載されていた「学力考 第1部」には、〈図る〉が「ずる」と読む中学生が多いことや地理の授業で「石狩平野」を漢字で書けない中学生が少なくないことを例示しながら、基礎学力不足で授業が進められない現状を紹介している(読売新聞 2010年1月3日付)。

また、同紙1月5日付の「学力考」では、大学生の基礎学力不足の実態を紹介しながら、国立大学を含む3割の大学で新生に補習を行っている現状が記されている。

(注6) そのことは、公開されている4年制大学のシラバスの中に、中学程度の内容と指摘されるものが増えていくことから伺えるであろう

(注7) もちろん、日本語表現法の授業では、6節で紹介した作文の添削(個人指導)のほかに、全体に示すべき内容は「例文集」を作成して、訂正すべき例文を示した上で訂正の理由や訂正方法等について説明を行っている。

(2013年11月29日 受理)